

「内部河川・運河の活用とコミュニティ強化」プロジェクト

代表者	志村秀明【教授】（建築学部 建築学科）
構成員	郷田修身、原田真宏、篠崎道彦、桑田仁、佐藤宏亮、前田英寿（建築学部 建築学科）／岩倉成志（工学部 土木工学科）

■プロジェクトの概要

東京湾岸地域の地域課題である河川や運河の活用やコミュニティ強化をテーマとして、学生が市民やNPO、民間事業者、自治体と協働しながら、課題発見から解決方法の提示まで行い、教育効果を高め、先進的な研究を促進し、更に社会貢献まで同時に実現しようとするものである。

建築学科の基礎的な講義科目から、発展的な演習科目、更にゼミナール科目や卒業研究までを相互に関係させつつ連続的に展開させることで、教育・研究・社会貢献の質を段階的に高めようとしている。単なる教育や研究に終わらず、実際のまちづくりを向上させること、また国際的な交流を推進することで、教育・研究・社会貢献の新しい展開と本学の社会的評価向上も狙っている。

■教育改革研究活動助成（地域志向）活動の成果

【教育】

学生は、講義科目で地域課題を理解し、PBLの形式をとるゼミナールや演習で地域課題の解決に取り組む。建築学科では、「都市地域計画」や「地域設計論」で地域課題を理解し、「プロジェクトゼミ」や「空間地域デザイン演習」で地域課題の解決に取り組んだ。また大学院では、「まちづくり特論」「都市計画総論」「Urban and Community Design」で地域課題を理解し、「建築学演習・都市地域デザイン」で地域課題の解決に取り組んだ。

特に「建築学演習・都市地域デザイン」では、江東区北砂を対象として、地域資源を活かした安全・安心なまちづくりを提案した。

【研究】

アクション・リサーチの手法に基づき、中央区月島では「月島長屋学校」を拠点として、佃島の旧魚問屋住宅である飯田家住宅の保存と活用に関する研究、指定管理者による子ども向けまちづくり模型講座に関する研究、PLATEAUを用いた江戸城紅葉山へのビスタと都市軸に関する研究、ポータルサイトの開設を通じた東京歴史文化まちづくり連携に関する研究、月島長屋学校を対象とするフォトグラメトリの3Dモデリングのデジタルアーカイブに関する研究が取り組まれた。

また日本建築学会で、東京湾岸地域に関する研究が4本発表され、SEATUC国際会議で、江東区の公園活用に関する研究が発表された。

【社会貢献】

江東区豊洲では、3年ぶりに「豊洲船カフェ」と「豊洲水彩まつり」が開催され、学生達は運河クルーズの企画と運営、船上からの見どころガイドを行った。船上ガイドでは、学生達は豊洲地区の地歴について学修し、乗船者に対して分かりやすく、また楽しくガイドを行い好評だった。

中央区月島では、学生が卒業研究を兼ねて、社会教育会館で指定管理者による子ども向けまちづくり模型講座のスタッフを務めた。

福島県南会津町館岩地区では、3年ぶりに「たのせふるさとまつり」が開催され、6名の学生が集落再生活動を支援した。



学生達が交代でガイドを務めた豊洲運河クルーズは、大好評だった。



「建築学演習・都市地域デザイン」では、防災空地で中間発表会を行った。



南会津町館岩地区で開催された「たのせふるさとまつり」では、学生達が特産品販売の手伝いなどで活躍した。

主なトピックス

プロジェクトゼミ 研究拠点「佃島学校」の部分的な施工作業

2013年に開設された「月島長屋学校」が、再開発のために取り壊されることになった。新しく開設される「佃島学校」の施工を、

- ①月島長屋学校の建具再利用のための障子張り
 - ②月島長屋学校の廃材を利用したテーブルの制作
 - ③佃島学校の窓格子制作
- などに8名の学生が取り組んだ。

これら一連の取り組みは、まちづくり活動拠点の新設に具体的に関わるだけでなく、建築を頭の中や図面、模型だけで考えるのではなく、身体的に学ぶことも目的とした。



障子張り：どうして建具の天地を逆にして障子を張るのか、障子紙は最後に霧吹きで水をかけるとなぜピンと張るのか、などについて、皆で議論してから作業に入った。3年生はコロナ禍でほとんどオンライン学修だった。体を動かしてのチームワークを必要とする作業は多いに刺激となった。



廃材を用いたテーブル天板の制作：月島長屋学校で棚板として使われていた廃材を用いて、テーブルの天板を制作した。ダボで接合することで、廃材を有効に活用できることを学んだ。またダボの強度など、実際に製作することで体験的に学ぶことができた。木材の表面をニスで塗装することで、見栄えが良くなること、また汚れを防ぐことになることも体験的に学んだ。



窓格子の制作：設計から材料の調達、道具を揃えるところから、8名で協力して作業した。学生達は、道具の使い方やチームワークの大切さを学んだ。

建築学演習・都市地域デザイン 地域資源を活かした安全・安心なまちづくり

20名の大学院生が、江東区北砂三・四・五丁目を対象として、江東区やUR都市機構、地元まちづくり協議会と連携して、安全安心なまちづくりを提案した。この地域には、下町情緒を残す砂町銀座商店街がある一方で、木造密集市街地の緊急整備地区に指定されている。そこで商店街沿道地区や防災空地を含む地区、砂町文化センター通り沿道地区などの5つの地区に分かれて、具体的なまちづくりを提案した。

10/19に開催した中間発表会と11/16に開催した最終発表会は、商店街沿いにある防災空地や文化センターで、市民の目に止まる状況の中で、地元まちづくり協議会の役員、江東区、URに対して行われた。

学生達は実際のまちづくりに貢献すると共に、まちづくりの現場から多くを学ぶことができた。

■フェーズ2

フェーズ2では、1での機能に加え、地面を再整備する。

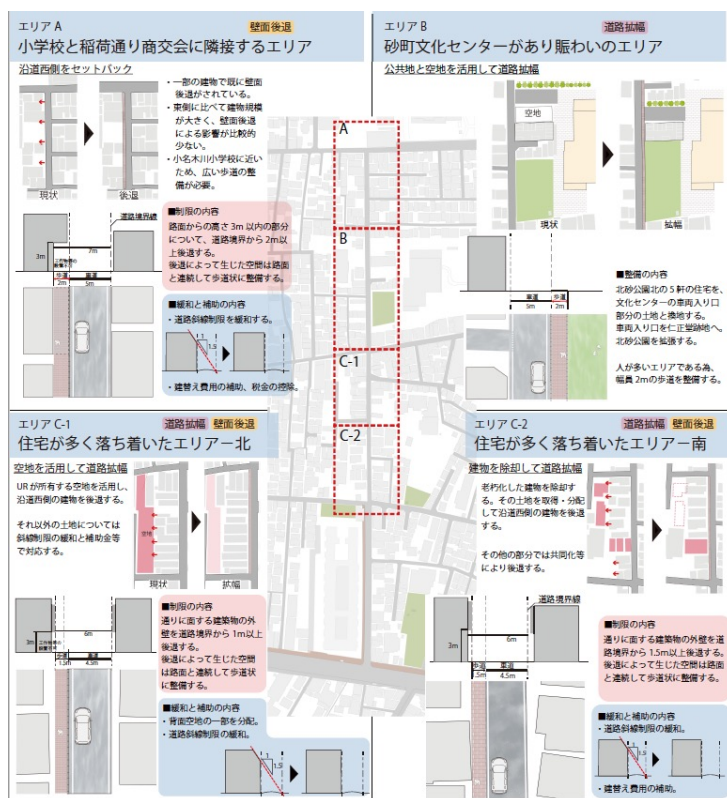
ベンチだけでなく、机・椅子を配置することで、商店街で買ったものを食べたり、休憩したりする場として用いる。

簡易的な机・椅子とすることで、フェーズ1のように広場としても利用できるようにする。

地面にラインを引くことで、さりげない境界を作り出し、休憩・通行を棲み分ける。



D班：商店街から砂町文化センターへ抜けられるような防災空地の活用をパースを描いてビジュアルに提示した。



E班 砂町文化センター通り沿道地区：地区の状況を踏まえて設定した4つの区間毎に、街路の拡幅と景観形成を提案した。